



大明小学校

校長室から

令和元年8月27日

No. 24

文責 校長 飯久保一男

夏休み 教職員も充電しました

教職員にとっても、夏休みは「ゆとり」のある期間です。前号にも書かせてもらいましたが、ラジオ体操にも参加できる「ゆとり」もありました。教職員も休養し、リフレッシュし、普段できない家族サービスもできたことと思います。

教職員にとっての夏休みは、それだけではなく、じっくり研修ができる期間でもあります。勤務時間に学校を離れて研修に行くためには、校長への届出と報告が必要になります。夏休み中に私が出勤しますと、いつも、私の机の上には、本校職員からの研修の届出と報告がたくさん積み重なっていました。

夏休みには、山梨県教育委員会主催の研修会や中巨摩教育協議会主催の研修会、それぞれの教職員が所属している研究サークルの研修会などがありました。中には夏休みの期間を利用して県外での研修に行く職員もいました。山梨県総合教育センターでは、年間を通して希望する研修が受けられるようになっています。その多くは夏休み期間に集中しています。この夏休みには、何日も、御坂にある山梨県総合教育センターに通う本校の教職員がたくさんいました。

日本の学校には、「校内研究」という他の国にはない素晴らしい文化があります。教職員が力量をつけていくためには、組織での研究・研修が必要です。そのための組織が「校内研究」です。本校では、今年度・来年度と南アルプス市より「学びの質を高める授業づくり推進事業」の研究指定校に指定されていますので、「校内研究」ではその指定された研究内容について研修を積み重ねています。

夏休みにも全体の研修会（右写真）を2日間、低・中・高のブロックの教職員で適宜研究日を設け、研修会を行いました。講師の先生を招いての研修会も行いました。明日（28日）も講師の先生を招いての研修会を行います。



また、「時間的ゆとり」があるため、職員会議も十分に時間をかけて行いました。さらに、万一の場合を考え、食物アレルギーをもつ子がアナフィラキシーショックを起こしたという想定のもとに、緊急対応のシミュレーション訓練（左写真）も行いました。

夏休みは教職員にとって、しっかりと充電する期間、2学期以降の授業や行事などに向けての準備期間です。子どもたちの顔を思い浮かべながら2学期以降の教材を考えたり、指導方法を学んだりと少しだけゆったりした気分で取り組みました。

働き方改革が注目されていますが、教職員にとっての「ゆとり」とは、夏休みのように「時間的なゆとり」を指すことが多いと思いますが、しっかりと研修をし、準備をしたことにより生まれる「心のゆとり」というものがあると思っています。この「心のゆとり」があるからこそ、子どもたちの学習にじっくり付き合ったり、子どもたちが考えている間、待つことができたりできるのです。

大明小教職員は、この夏休みにフルに充電し、2学期以降、子どもたちのために全力で取り組んでいく準備が整っています。2学期もこれまで以上に、ご協力をお願いいたします。

私ごとで恐縮ですが…

教え子との再会

今年の夏休みは、私が23年前に6年生を担当した子たち（子どもではなく35歳の大人）の集まりに呼ばれました。私が校長になったことを祝ってくれました。卒業以来の再会という子も多く、立派な大人になった彼らを見て、私も髪の毛が薄くなるはずだよなあと思いました。

彼らの小学生時代の思い出話に花が咲きました。私もその当時のことを思い出しながら話をしていました。その中には、私は全く思い出せないのですが、参加した教え子たちは一同に「あった、あった」という内容がいくつかありました。それらの多くは、私が怒ってやったことや脱線してやったことなどでした。私は覚えていない＝忘れてしまっていることを、彼らは全員が覚えているという変な形になりました。

これまでいくつのクラスを担当したかな、と考えてみたところ…、持ち上がって2年間同じクラスを持つこともありましたので、20クラスほど、500人以上を受け持った計算になります。その中で、私がしたことや、言ったことをさすがにすべて覚えていません。6年生の担任が一番多くやっていますが、そのどのクラスにも同じことをしたのではなく、それぞれ違う指導や取り組みをしていますので、覚えていることも多いのですが、その一つ一つにどんなねらいをもって指導したのかを問われても答えられません。しかし、子どもたちにとっては1回だけの6年生であり、1人だけの担任ですので、あのときに先生はこう言った、こんな顔をしていたということまで覚えている場合もあることを思い知らされました。子どもたちからすると、教員側から見たいくつも担任した中の一つのクラスではなく、一生に一度のクラス・一人っきりの担任であるのですから、それを深く自覚して指導することの大切さを教えられた結果になりました。もちろん、それぞれのクラスに、いい加減な気持ちで指導したわけではなく、そのときそのときには本気で取り組んで来たと思自負しています。このことは、担任だけでなく、校長はじめ、全教職員がそうでなくてはなりません。



この夏に再会したのは、私が33歳のときに6年の担任をした教え子たちです。彼らは、卒業アルバムに、自分たちが「先生と同じ歳（33歳）になったら何をしているか」と将来の夢を書いていました。ある教え子から

「私たちを担当したときの先生は、今の私たちよりも若かったんですね。

それで、あのバイタリティだったことはすごいことだと思っています。」

と、たぶん、褒め言葉らしき言葉をもらいました。自分がその歳になってみて、初めてわかる苦労（のようなもの）もあるようです。

長いこと教員をやっている場合の「あるある」だと思いますが…。以前に教えた子（すでに大人）と再会したときに、一番キビシイ質問は「先生、私が誰だかわかりますか？」という問われ方です。子どもころそのままに大人になっていて、一発でわかる場合もありますが、特に、女の子はわかりづらいものです。まして、その親になると…。ありがたいのは「先生、〇〇です。覚えていますか？」という言い方、親であれば「□□小学校で担任してもらった〇〇の母です。」と名乗ってくれる言い方です。これならば100%わかります。同じ学年の隣のクラスである場合でも、ほぼわかると思います。

…私はミニバスの監督も長いことやっていますので、チームの子（もう大人も多い）とその親は100%わかりますが、よそのチームの選手や親となると、困ることも多くあります。

…ちなみに、現2年2組担任の都築は私が監督しているミニバスチームのOG卒団生です。育休中の前2年2組の担任の雨宮はよそのチームの選手、高学年の学習支援の島立はよそのチームの選手の親です。

**下手な外科医は、一度に1人しか傷つけないが、
ダメな教師は、一度に100人を傷つける。**

アーネスト・ボイヤー（アメリカ・教育者）

戒めとして教職員に紹介することのある言葉です。